

八千代市萱田の石造物にみる女人講の姿

蕨 由美

はじめに

下総では江戸時代、庚申講などと並んで、ムラの女性たちが集って神仏に祈る女人講がさかんであった。特に利根川下流域の地域には、江戸時代初期からの「十九夜」の銘のある石塔が数多く残されていて、死後「血の池地獄」で苦しむ女人を救済するという如意輪観音に来世と現世の安楽を祈る「十九夜講」が、江戸時代の代表的な女人講であったとされる。一方、一般に「子安観音」といわれる主尊が母性を明らかにして子を抱いた姿の子安像塔の建立が、江戸中期に印旛沼東岸から始まり、幕末から近代には如意輪観音の十九夜塔を上回ることから、下総では十九夜講にかわり、安産子育てを願う「子安講」が主流になっていったと思われる。

旧萱田村は下総でも古い歴史を持つムラで、今も寺社境内などに残る江戸期からの石造物にさまざまな女人講の姿をうかがい知ることができる。特に、十九夜塔の成立以前の女人講萌芽期の過程、子安信仰の変遷、そして「流れ灌頂」の習俗の名残を留める特徴的な石造物を紹介しながら、かつての萱田の女性たちの信仰の姿を探ってみたいと思う。

1. 十九夜講の成立とそれ以前の女人講に関連する石造物

八千代市内で、女人講が建てた石造物は、村上の正覚院にある十九夜塔が最古(*1)で、寛文11年(1671)銘の丸彫りの如意輪観音像の背面の衣に「像立十九夜女人 念仏講衆」と刻まれていることから、寛文年間には念仏主体の十九夜講が成立していたと推定される。次いで高津の観音寺には、延宝2年(1674)造立の六臂の荘厳な姿の光背型如意輪観音像の十九夜塔があり、衣の裾と台座には「おつる おみや おまめ」など結願した女性の俗名が多数刻まれている。



No.3 元禄2年(1689)十九夜塔



No.4 元禄14年(1701)と下部銘文拓本



No.5 正徳3年(1713)

萱田でも長福寺には、「十九夜」の銘をもつ石塔として、元禄 2 年（1689）と、「おさわ おせん」など多数の女性名が彫りこまれた元禄 14 年（1701）、正徳 3 年（1713）銘の 3 基の如意輪観音像塔（表のNo.3.4.5）が残されていて、萱田村では元禄のはじめのころから十九夜講が組織されていたと思われる。

さて、元禄以前の萱田の女人講の姿はというと、長福寺の寛文 9 年（1669）三層塔（No.1）や、延宝元年（1673）の飯綱神社下の庚申塔（No.2）に刻まれた男女別の連名にもうかがい知ることができる。

寛文 9 年銘三層塔は、勢至菩薩を第 2 層に浮彫りした 2m を超す石塔で、第 1 層は龕室となっている。右面には「廿三夜講」「一結施主 女中衆」として「おつる おこう おくま」など 24 名の女性が、左面には「日記念仏供養」のため「定宥 □左衛門 □兵衛 長十郎」など 33 名の男性、裏面には建立発起人とみられる「宥秀」ほか「加左衛門」など 3 名の村人が名を連ねている。なお、三層塔の形態については、東総の旭市塙の墓地などに故人供養塔として、数多く見うけられる。

また、延宝元年銘庚申塔は、笠付角柱型で三面にそれぞれ猿を浮彫りし、右面には「およし おきく」など女性 33 名、左面には男性 15 名、表面には「定宥」と 3 名の男性の名がある。

関東の近世庚申塔は、元和 9 年（1623）東京都足立区の弥陀三尊来迎図像の板碑型を初出として旧荒川流域に広がる。そして 17 世紀後半に入ると、男性の連名に交じて女性名がみられるようになり、寛文 13 年（1673）東京都江戸川区では、女性のみ 25 名で板碑型庚申塔を建立し、これを女人講の萌芽とみなしている。（*4）

萱田でも、寛文 9 年銘三層塔と延宝元年銘庚申塔は、面を違えて男女別に銘を刻んでいることから、1670 年ごろ下総では、中世からの村落寺院を中心に、

「二世安楽」などを祈願する念仏を主体とするさまざまな女人講が営まれ始めたと推測できる。

また江戸時代中期（1716～1804）に入ると、長福寺には、宝暦 13 年（1763）銘の宝篋印塔 1 基が建てられている（No.6）。「地藏講中 法印祐運代」「十九夜講中 當村善女



No.1 寛文 9 年（1669）三層塔 ↑
↓ 東総の旭市塙の三層塔群



No.2 延宝元年庚申塔の右面 No.6 宝暦 13 年宝篋印塔

人」と併記されていて、三層塔と同じく複数の講がともに建てたことがわかる。

なお、東隣の旧村上村の辺田前には、文政3年(1820)に、萱田と村上の「女人中」がともに、丸彫型如意輪観音像(No.8)を建てており、これも十九夜講など両村女人講の供養塔であろうとおもわれる。

2. 「子安大明神」石祠と子安像塔の登場

幕末から近代にかけては、萱田でも子安像塔が多数登場する。八千代市内では、元文2年(1737)に島田で「子安釈迦」銘の子安像塔が現われるが、「子安観音」の像を刻んだ石塔は、米本林照院の文化11年(1814)が初出である。

萱田には、長福寺に嘉永5年(1852)・明治21年(1888)と大正9年(1920)、飯綱神社に文久2年(1862)と明治21年(1888)、時平神社に明治30年(1897)、萱田上自治会館に大正元年(1912)の銘の子安観音を浮き彫りにした子安像塔が、計7基残されている(No.10.12.17.11.13.14.15)。個人名の連記のほか、「女人講中」銘が多いが、時平神社の子安像塔だけは、「十九夜」の銘を残す。また「下ノ庭・北海道・菅地」「志津根」などの字(「ニワ」)名を刻むのも、幕末から明治期の特徴であろう。



No.10 嘉永5年子安像塔



No.11 文久2年とNo.13 明治21年



No.12 明治21年



No.17 大正9年

また、萱田ではこれらの子安像塔に先立ち、「子安大明神」の銘のある石祠が、安永6年(1777)萱田上自治会館前(旧薬師堂)に登場する(No.7)。その側面には「茅田講中 四十人」の銘もあり、ムラ単位の子安信仰の姿がうかがえる。さらに長福寺にも天保3年(1832)銘の「子安大明神」石祠がある(No.9)。

八千代市内では、上高野子安神社の元禄16年(1703)をはじめとして、子安像塔よりむしろ子安神の銘のある石祠が、早くから路傍や神社に数多く祀られている。

十九夜講など念仏中心だった女人講の系統以外にも、子授け



No.7 安永6年子安石祠

No.15 大正元年子安像塔

を祈願する基層信仰が地域に根強くあったと思われ、後の子安像塔建立に先行する子安信仰の姿を、萱田でも見ることができる(*5)。なお、これらの石祠や石塔は、近くの路傍などから移動して現在の寺社境内にある可能性も否定できない。

3. 産死者供養「流れ灌頂」の名残をとどめる供養石塔

萱田下の旧集落では、菅地・北海道・原口の3つの「ニワ」ごとに子安講もそれぞれ別に行われていた。2010年春の聞き取り調査では、今も子安講を行っているのは萱田下の菅地で、毎月1回夜に飯綱神社で行い、日取りは次回の当番の都合で決めるので不定期、世間話中心で宗教的な行事ではないとのことであった。

また「北海道」の子安講は、萱田下の公会堂で昭和四十年代までやっていたが、今は年1回年末に「かわせがけ」を行うだけとのこと。この行事は飯綱神社下の「子安さま」にお花とお米とお水をあげて拝むとのことだが、この「子安さま」とは、飯綱神社の境内の外、辺田道沿いの庚申塔群の左片隅の角柱型真言供養塔のことで、この「子安さま」は、もとは須久茂谷津の弁天脇の川べりにあり、そこはお産で死んだ人を供養するところだったという。

角柱型供養塔は2基あり、裏に昭和60年(1985)銘のある手前の新しい石塔(No.19)の4面には、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の梵字の真言や「檀波羅蜜大慈大悲一切衆生」などの願文が刻まれている。奥の古い石塔(No.16)は、大正7年(1918)銘で、同様に梵字の真言があり、下部が埋没しているが、根元を掘ってみると裏面下部に「萱田村下区」に続き「子安」の文字が現れ、やはり子安講が建立した石塔であることがわかった。

「かわせがけ」とは「川施餓鬼」のことであろう。また川べりで産死者の供養をする習俗は、民俗学では「流れ灌頂」と呼ばれ、「産死者や水死者、無縁の死者を弔うために行なわれる儀礼」であった。「習俗として、主に産死者、あるいは女性死者全般のために広く行なわれ、小川に卒塔婆、四本竹を立てて赤い布をつけ、道行く人がそれに水を掛けるなどした。赤い色があせると、血の池地獄に墮ちた死者が救われるという。水を掛ける際に、『産で死んだら血の池地獄、あげておくれよ水せがき』などの唄を歌うこともあった>(*6 *7)という。

この民俗事例を参考に、新川の村上橋西詰北側に立つ石柱(No.18)を改めて調べてみた。銘文はほとんど風化しているが、飯綱神社下の石塔の翌々年、大正9年(1920)建立で、表面には真言に続き「萱田上區産



No.16 大正7年供養塔(↑右)

No.19 昭和60年(↑左)

No.18 大正9年(↓村上橋脇)



死者万霊（菩提）」、裏面には建立年と萱田上区の世話人女性4名の氏名、そして「外女人一同」の文字が読みとれ、これもまた産死者の供養塔であることが判明した。

八千代市内には、新川沿いの平戸橋脇などに明治30年代から大正にかけて水難横死者の霊の菩提を祈る供養塔が数基あるが、村上橋詰の石塔は、これらの水難供養塔とは、性格を異にする女人講に関連する供養塔とみなすべきであろう。

さらに同時期の角柱型の石塔を見てみると、吉橋の花輪公会堂の子安塔群の中に、翌年の大正10年（1921）建立された「為塙区代々産死者万霊菩提也／塙区子安講中建之」銘の石柱がある。これも以前はおそらく川べりにあったのだろうか。大正7～10年、八千代市内では、3基の産死者供養の角塔婆石塔が子安講などの女性たちの発意で建てられたことになる。

おわりに

北総において幕末から明治期にかけてさかんに建てられた子安像塔も、大正期から量的質的にも衰退しはじめ、萱田では「志津組」の大正9年の造塔が最後となる。その同時期、萱田の上区・下区の女性たちは、木製塔婆に替えて石の塔婆を建て、「流れ灌頂」の信仰形態を近代的な石塔参拝に代えて、子安講としての祭祀を続けたと思われる。

萱田や以前調査した高津などのお年寄りの話でよく出てきた「流れ灌頂」の習俗も、産科医療が進み、「血の池地獄」の差別的な迷信から解放された現在ではさすがに全く廃れてしまい、今は各市町村史の民俗編や民俗辞典の記述により知識として知るだけになった。その「流れ灌頂」の記憶が、萱田や吉橋花輪などに現存する百年前の石塔にも留められていること、下総を席卷する十九夜講が成立していく江戸初期の過程では、念仏中心の講が男女別に組織されていくこと、また江戸期後半以降に普及する子安像塔に先がけて、子安神を祀る石祠が建てられ、念仏主体の十九夜講とは別系の子安信仰の姿がみられることなど、時代によって変遷する女人講の姿を、萱田をフィールドとした石造物調査で把握できたと思う。

最後に、長福寺三層塔の銘文解説資料を提供いただいた滝口会員、石造物の採拓や銘文解説にご協力いただいた関和・藤村・鈴木千代会員に感謝します。

参考資料：1.『八千代市の歴史 近代・現代Ⅲ 石造文化財』平成18年 八千代市

2.『房総の石仏百選』平成11年 房総石造文化財研究会 たけしま出版

3.『続房総の石仏百選』平成22年 房総石造文化財研究会 たけしま出版

4.「東京東部庚申塔データ集成」『文化財の保護』第43号 平成23年 東京都教育委員会

5.「北総の子安像塔の系譜」蔵由美『房総の石仏』2010年第20号・2011年第21号房総石造文化財研究会

6.「血盆経信仰の諸相」高達奈緒美 2011年「慶應義塾大学 アジア基層文化研究会」のWebサイト

7.『いちかわ民俗誌』萩原法子 昭和60年 崙書房

八千代市萱田の女人講に関連する石造物一覧表

No	造立年 所在地	形状 種類	銘 文 []内のカナは梵字
1	寛文9 (1669) 長福寺	三層塔 勢至菩薩浮彫 二十三夜・ 日記念仏塔	宥秀代作之 加左衛門 二郎右衛門 二郎兵衛 / [サク]萱田村 奉造立塔供養廿三夜講 開眼當二世悉地成就攸 二月 廿三日 敬白 / 一結施主 女中衆 おつる おこう (女性計 24名) / [キリク]萱田村 日記念仏供養開眼 諸願成就所 二月十日 敬白 / 本願花嶋七口兵衛 一結施主 / 定宥 □左衛門 □兵衛 長十郎・ 市左衛門 文十郎 治右衛門 太兵衛 久三郎 (男性計 33名)
2	延宝元 (1673) 飯綱神社下	笠付角柱型 三猿付 庚申塔	奉造立庚申之人数石仏立之現當二世悉地所、定宥 佐藤加左衛門 長 岡与左衛門 花嶋市□□ 敬白 / およし おきく (女性計 33名) / 四良兵衛 甚左衛門 門左衛門 太兵衛 庄二郎 (男性計 15名)
3	元禄2 (1689) 長福寺	光背型 如意輪観音 十九夜塔	[サ] 十九夜諸願成就二世安樂所 施主 一結 四十四人 敬白
4	元禄14 (1701) 長福寺	光背型 如意輪観音 十九夜塔	[キリク] 奉供養拾九夜萱田村 念仏現當安樂之攸 おさわ おせん おみの おたけ おたつ おたま おひわ お□□ おせん お□ お林 おため お□ おたま・ (女性計 42名)
5	正徳3 (1713) 長福寺	光背型 如意輪観音 十九夜塔	奉供養 / 十九夜念仏現當二世安樂之攸 / 願主 / 萱田村 おくめ おい□ おくめ お□せ おひ□ お古や おせん おくた おまん お志□ お□ヤ お□□ おろく・ 女人中 (女性計 34名)
6	宝暦13 (1763) 長福寺	宝篋印塔 十九夜塔	[四方梵字=ウーン タラーク キリク アク] 奉造立地蔵講中 法印祐運代 奉供養十九夜講中 當村善女人
7	安永6 (1777) 萱田上自治会館	子安神 石祠	子安大明神 茅田講中 四十人
8	文政3 (1820) 村上 辺田前公会堂	丸彫型 如意輪観音 供養塔	村上 萱田 女人中 (像の頭部欠損)
9	天保3 (1832) 長福寺	子安神 石祠	子安大明神
10	嘉永5 (1852) 長福寺	光背型 子安像塔	願主 さだ ひで / 世八人 金五右エ門 市良兵エ 甚右エ門 次良兵エ / かつ うめ あと せん・ / さわ もん ・ (女性計 86人)
11	文久2 (1862) 飯綱神社	光背型 子安像塔	[キリク] 萱田村 下ノ庭 北海道 菅地 女人講中 三拾九人
12	明治21 (1888) 長福寺	光背型 子安像塔	志津根女人講中
13	明治21 (1888) 飯綱神社	光背型 子安像塔	[カン] 子安観世音 女人講中
14	明治30 (1897) 時平神社	光背型子安像 十九夜塔	十九夜 北海道 女人講中
15	大正元 (1912) 萱田上自治会館	光背型 子安像塔	女人講中 久々田區 石工 吉野喜平治
16	大正7 (1918) 飯綱神社下	角柱型 真言供養塔	[キャ カラ バア 種字10字] 檀波羅蜜大慈大悲 (埋没) [キャー カー ラー パー アー] 地藏菩薩以大慈悲若聞 (埋没) [ケン カン ラン バン アン] 萱田村下区 子安 (埋没) [キャク カク ラク バク アク] 六大無□常瑜伽四種 (埋没) 三密加持速疾顯重々 (埋没)
17	大正9 (1920) 長福寺	光背型 子安像塔	[キリク] 志津組 二十一名
18	大正9 (1920) 村上橋西詰北	角柱型 真言供養塔	□□波羅蜜大慈大悲 (埋没) □□萱田上區産死者万霊菩 (埋没) / 萱田上区 世話人 君塚□た 長岡□た 八木谷かつ 君塚□□ 外女人一同
19	昭和60 (1985) 飯綱神社下	角柱型 真言供養塔	[キャ カラ バア 種字10字] 檀波羅蜜大慈大悲一切衆生 [キャー カー ラー パー アー] 地藏菩薩以大慈悲若聞名號不墮黒闇 [ケン カン ラン バン アン]、[キャク カク ラク バク アク]六大無礙 常瑜伽 四種曼陀各不離 三密加持速疾顯 重々帝網名即身

